

「高等教育の重要性」
ブルース・L・バートン
1999.2.8 放送

年が開けてからひと月が経ち、大学の受験シーズンが本格的に始まっています。受験生はラストスパートに入っており、必死に勉強していることでしょう。我々大学の教員も、年度末の成績評価、入学試験の監督、そして新年度の準備と、忙しい時期を迎えています。新年度の準備といえば、多くの教員にとっては授業の準備を意味するでしょうが、同時に心の準備をする良い機会でもあるような気がします。高等教育とは何か、大学の教員として何をすれば良いのか、こうした基本的な問題を年に一回くらいは考えてみたいものです。

大学受験といえば、視聴者の皆さんにも様々な記憶や思い出があるかも知れません。受験前の過酷な勉強、受験当日の緊張感、結果発表までの希望や不安に満ちた日々、そして待ちに待った合格発表に伴う喜び。こうした経験が、一人ひとりの心に深く刻みつけられていることと思います。

皆さんがこのような思いをするのは、大学受験が日本社会においてそれだけ重要な意味を持っているからです。たとえば、どの大学に入学したかということが、その後の就職に影響を与え、ひいてはどのような人生を送るかにも関わってくる可能性があります。善かれ悪しかれ、受験というものは、それだけ大事なものです。

ところで、受験勉強がうまくいって志望校に入学できた後はどうでしょうか？残念ながら、大学受験とは対照的に、大学で行われる教育そのものは、日本社会においてそれほど重要な意味を持っているとは言えません。

たとえば、大学生の行動を見てみましょう。我々外国人が日本の大学に来て一番驚くのは、学生が、アルバイトや友達とのつきあいばかりに時間を費やし、あまり勉強しないということです。もちろん、なかには熱心に勉強する学生もいますが、適当に遊んで適当に勉強している人が大半を占めるのではないのでしょうか。

大学生があまり勉強しない理由は、いくつかあります。一つは、大学に入るまでの受験勉強があまりにも過酷なので、入学後はしばらく勉強から離れて生活を楽しまたいという気持ち、学生の側にあるからです。

しかし、それだけではありません。大変残念なことですが、大学生があまり勉強しないもう一つの理由は、大学の教員がちゃんと指導しないからです。教員のなかには非常に教育熱心な先生がいる一方で、自分の研究のみに没頭して学生の指導や教育に力を入れない先生もいます。もっと残念なことには、研究も授業も疎かにしている人すらいます。また、学生に対して毅然とした厳しい態度をとらない教員がいるために教育環境が悪化し、私語がとびかう教室で、学生は勉強をしなくても楽に単位をもらって卒業するという事態すら生じています。

こうした教育環境の悪化は、直接的には個々の教員の責任ですが、より広く見れば、そ

うした教員を許す大学当局にも大きな問題があります。一般的に言って、大学の人事システムは終身雇用と年功序列を基本としており、一度採用された教員はよほど大きな問題を起こさない限り、一生その大学に勤められるだけでなく、昇級や昇格もほとんど自動的に行われます。つまり、大学の教員は、あまり熱心に授業をやらなくても、待遇面で不利になることはないのです。

それならば、質の高い授業を熱心に行ってくれる有能な人をはじめから採用すれば良いと思われるかも知れませんが、残念ながら、教員の採用のあり方にも問題があります。ポストの空きがあれば、公募をして広く人材を求めれば良いのに、すぐに縁故採用や天下り人事を行ったりするのです。それでも、百歩譲って優秀な人が見つければ良いのですが、そのようなケースは稀のようです。

ところで、ここ数年、大学改革の動きのなかで、学生が教員を評価したり、雇用体制を終身雇用から任期制に変えるなど、さまざまな試みがなされています。大学によって取り組み方は多様ですが、たとえば任期制などは、ひょっとすると定着するかも知れません。というのも、18歳人口の減少に伴って大学の経営も厳しさを増しており、特に私立大学は、教員のリストラを含めて何らかの生き残り対策を講じなければ、つぶれる恐れがあるからです。

ただ、ここで強調したいのは、こうしたリストラによって教育の質が向上するかということ、必ずしもそうではないということです。大学の教員は一般的に暇だと思われがちですが、実はかなり雑用の多い職業です。とすると、リストラによる教員数の削減によってさらに忙しくなり、かつ雇用の保証もなくなると、教育について考える余裕さえなくなるということにもなりかねません。

大学の経営がこれから厳しくなることは避けられない事実ですが、生き残り対策として、教員のリストラではなく、本当に良い商品、つまり優れた教育を提供することによってこの厳しい時代を切り抜けるという選択肢もあるはずです。しかし残念ながら、こうした姿勢で臨もうという大学は、今のところあまり見当たりません。普段から大学があまり教育の質にこだわらないために、こういう発想がそもそも出てこないのでしょう。

このように日本の大学は、必ずしも教育の内容を最優先しているとは言えないようです。これはまた、日本の社会全体が高等教育をそれほど重視していないからではないでしょうか。たとえば、新卒大学生の就職事情が何よりもこのことを物語っています。採用する側の企業が重視するのが、新卒者が「何を勉強したか」というより「どこを出たか」だということは周知の事実です。確かに、ここ数年、教育内容を重視する企業が増えてきていますが、一般には、学生が出た大学名にこだわる企業が依然として多いです。

こうしてみると、よく留学生が不思議がる、「日本の学生はあまり勉強しない」という事実にはそれなりの理由があります。学生が勉強しないのは、教員が勉強させないからです。教員が勉強させないのは、大学当局が教育内容を重視しないからです。そして大学当局が教育を重視しないのは、最終的に社会全体が高等教育を評価していないからです。こうい

う図式になります。

これはかなり重大な問題ではないでしょうか。というのも、歴史的な観点から言っても、高等教育を重視しない国は、そのうちに衰退していくからです。特に、これからの情報化社会においては、高等教育が持つ意味がますます大きくなっていくに違いありません。日本の技術力は確かに世界的に見ても高い水準に達していますが、高等教育にもっと力を入れていかないと、その技術力も維持できるはずはありません。

大きな問題だけに単純な解決策はありませんが、とりあえずは、受験シーズンというこの大事な時期に、我々教員を始めとして、大学関係者の一人ひとりが、高等教育の重要性を再確認する必要があるのではないのでしょうか。我々が本当に良い教育環境を作っていけば、その姿勢が、受験生や新入生に伝わり、やがては大学を目指す人たちや企業など、社会全体に広まっていく可能性があると思われれます。是非そう願いたいものです。

それでは。